

平成 25 年度第 7 回文系チャレンジ講座が、2014 年 1 月 15 日、「人・モノの『移動』から見る世界史」をテーマとして、本学教育福祉科学部の甘利弘樹先生によって行われました。遠隔配信された大分雄城台・大分鶴崎・大分商業・安心院・日田・別府青山・大分西・三重総合・臼杵・高田・国東の 11 校(246 名)と、来学した大分南・大分豊府(39 名)を合わせて、計 13 校 285 名の高校生が受講しました。

甘利先生は、授業のはじめに「高校生の皆さんの中には、『歴史』と聞くと、『過去のこと』、『多くの暗記』というイメージがあると思います。皆さんが自ら歴史を学んで日々の生活に生かすためには、『歴史』のダイナミズムな側面やデリケートな側面を見だし、意識することが大切です。」と説明しました。そして、「今回の授業は国境や文化の違いなどの境界を越えて世界を移動した人々やモノに焦点を当てながら、世界レベルの歴史の扉を開きましょう。」と続けました。

「移動」という観点で歴史をとらえ直すと、従来のものとはまったく異なる歴史像が浮かんできます。それは、通常、歴史は主として定住している人たちを軸に考えてきたからです。甘利先生は、受講生に「移動」と「定住」という少し異なった角度から歴史を見ようとしてしました。「移動」の主な要因は、①自然や社会が障害となっている場合、②新たな可能性を求める場合、③社会的・技術的な環境の変化などがあると説明しました。

例えば、大航海時代による銀の活発な移動が、文明の先進国がアジアからヨーロッパに移行する契機になったこと、江戸時代の鎖国政策の捉え方、18 世紀においてヨーロッパ諸国が人口と商品の移動を巧みに活用して、世界経済の主導権をにぎっていったことなどは、世界史の流れをつかむ上で大変重要だと説明されました。また、日本においても幕末から明治維新への政権交代の出発点は、人口増加の受け皿が不足した薩長土肥の切実な事情が関連していたのではないかという説明は、幕末史に合理的な視点を与えてくれました。

授業の中で、質問をし、正解と思う番号の書かれた用紙を掲げるよう指示をしたり、遠隔配信校や来学受講校の受講生との交流を行うなど、日頃の高校での授業では味わえない他校生のようすを見ながらの授業は、受講生にとって大変刺激的なものようでした。

最後に、大分県における外国人との共生についての話題に移り、現在、大分県内の留学生を含む外国人数は約 1 万人で、平成 24 年 5 月 1 日現在、留学生数は 3,562 人で全国第 10 位、大学・高専に在籍する留学生数は人口 10 万人あたり 297 人で全国第 1 位(いずれも大分県国際政策課調)であると、説明しました。このことから過去・現在を問わず、人は「移動」していることを意識させられる授業でした。

甘利先生は、「歴史を意識しながら現在そして未来を生き抜く意義を感じ取ってほしい。」ということばを、受講生に送りました。

講義後のアンケート調査では、「総合的に判断して良かった」(85%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ)、「教員は真剣に取り組んでいた」(97%)、「授業内容はわかりやすかった」(72%)、「板書(スライド)は適切だった」(66%)、「受講生は授業に意欲的に取り組んだ」(92%)という評価結果がでました。遠隔配信校では、途中、機器の不具合があったことから、「音声は良く聞こえた」(58%)、「映像はよく見えた」(63%)という結果になりました。不具合の原因を調査しています。

受講生の具体的な声として、「他校生と授業を受けることが新鮮だった。」「今まで考えていた歴史と違い、歴史は人の足跡だと思った。」「甘利先生の真剣さがひしひしと伝わってきた。」「大学の授業形式に興味があった。」「スライドと授業内容が印刷されたプリントとセットで、理解しやすかった。」「機器の不具合があり、残念だった。」など、多くの感想が寄せられました。

